

# 紀末茂「臨水觀魚」詩が描く朝隱

— 張正見詩から「渭水終須卜、滄浪徒自吟」を削除した理由 —

月 野 文 子

## 一 はじめに

『懷風藻』に収載される紀末茂の「臨水觀魚」詩は、沢田総清、杉本行夫、林古溪らの注釈<sup>②</sup>ではかなり好評価を得ていたが、大野保と小島憲之が、張正見の「釣竿篇」詩との酷似を指摘して以降、ほとんど評価されることなく今日に至っている。紀末茂自身は、張正見詩をどのように捉えて利用したのか。この点について十分な検討がなされたいは言い難く、また、合わせて論ずべき詩題の変更についても言及されないままである。

紀末茂の詩を張正見のものと比較するにあたって注意しておくべき点が三つある。第一点は、詩題を変えていることである。第二点は、張正見詩の十二句そのままではなく、八句にあらためた点である。第三点は、釣りの舞台を「川」

から「池」に変えたことである。それによって如何なる効果を狙ったのかを検討する必要がある。これまで、三つの変更点に注意が向けられなかつたのは、両作品の類似部分だけが強調されてきたからであろう。

張正見詩との酷似（小島の言葉を借りれば盗作）が指摘されたことは、研究史上大きな意味を持つのであるが、それ以降は研究対象から除外されてしまったことは残念である。何よりも疑問に思うのは、紀末茂だけが張正見の詩を知り得たのかということである。当時の漢籍の入手経路を考えれば、舶来した漢籍を一官僚が我が物として独占することは難しいであろう。したがって、紀末茂が知り得た張正見作品「釣竿篇」は、同時代の知識階層も知るところであったとみておかなければならない。なお、この点については、辰巳正明『懷風藻全注釈』は「(著名な作品を)臆

面もなく盗作すれば、直ぐに露見して笑いものになるはずである」としたうえで、五言古詩体を五言律詩として詠む「詩作の時のモデルを示したものとみている」<sup>(5)</sup>。また、張正見詩との類似について、鳥羽田重直は盗作ではなく「破格的な集句詩」もしくは「本歌取り」的作品として位置づけようとした<sup>(6)</sup>。

ともかく、紀末茂の当該詩が『懷風藻』編纂当時まで残り得たという事実も見逃すことはできない。大宝の頃に没したと推測される紀末茂の詩は、制作されてから『懷風藻』が編纂された天平勝宝三年（七五一）まで五十年近い歳月を経ていたことになる。この間、当該詩はどのようなかたちで残されていたのであろうか。編纂者が手にした原資料（紀末茂詩が記載された紙幅）としては如何なるものを想定すればよいかである。『懷風藻』に収載された詩はその殆どが集団の場で詠まれたものであり、予作も含めて、詩宴に同席する人々にその場で披露することを前提として作られているといつてよい。それはとりもなおさず、一首しか作品の残らない多くの懷風藻詩人の「侍宴詩」などは、何らかのかたちで詩宴当日に記録されて残り、その結果、時を経て編者の目にとまり得たことを想定させる。『懷風藻』に収載された紀末茂の詩が一首のみであるところをみると、藤原宇合や石上乙麻呂のように個人の作品集があつ

たということではなさそうである。したがって、一首だけ残された紀末茂の詩も侍宴詩などと同様に、記録されたことを想定せねばならないだろう。さらに、当該詩が『懷風藻』編纂者の選択眼を経ているということも忘れてはならない。多くの作品が灰燼に帰した近江朝ならばともかく、紀末茂の活躍した文武朝以降は採るべき作品が多く残されていたはずであり、編纂者は敢えて低評価の作品を採る必要はなかつたはずである。辰巳のいうように、古詩を律詩体に整える手本として示しただけのものならば、評価は得られず、残されることもなかつたのではあるまいか。

集団の場で、著名な作品を模す（基づくところの作品が簡単に想起できるような詩を賦す）意図は何であつたのかを、いま一度『懷風藻』の作品全般を見渡しながら考えてみる必要があるだろう。中国では、先行作品の特徴的な語句を使用しつつ、その筆意を写すという作詩の手法が古くから存在しており、『文選』にもまとまつたかたちで収載されていることから、その影響も考慮に入れなければならぬだろう。

結論めいたことを言えば、稿者は、紀末茂が張正見「鈞竿篇」詩を利用しつつ、詩全体の意味するところを変え、作詩の場に相応しいものとして披露したのではないかと推測する。具体的には、張正見詩から（身の処し方）を意味

する「渭水終須卜、滄浪徒自吟」の句を取り除いて、(暫時、隱者のごとく釣りを楽しむ)内容へと主題を変えたとみるのである。その意図が明確に伝わったからこそ、その場に同席した人々に評価されたのではないか。以下、上述のことを考慮しつつ、あらためて両作品を比較して、紀末茂の意図と詠作時の状況について考えてみたい。

## 二 詩型と語句の変更

先行研究が指摘するとおり、張正見の「釣竿篇」詩は十二句で構成されているが、紀末茂はそのうちの八句のみを利用して律詩形式の一首としているのだが、当該詩は押韻文字も含めて、張正見の特徴的な語句の多くをそのまま使用している。平仄については、「釣竿篇」は樂府題であり、且つ六世紀の作品なので、近体詩の概念である平仄式に縛られないことはいうまでもない。一方、紀末茂の作品は、八世紀に入ってからのものであり、また、題も樂府題から改めているので事情が異なる。紀末茂の「臨水觀魚」は各句中の〈二四不同〉も守られており、〈下三連の禁〉についても許容範囲とされる転句に相当する箇所のみで使用している。また、平仄上の問題は隣接する句との関連も重要であるが、そのことも意識されており、当然のことながら、平仄をあまり意識しない樂府詩である張正見のものより整

っている。「秀逸」(沢田)、「頗る出色の作」(杉本)などの評価がなされた所以でもあるう。たとえば、近体詩で縛りのかかる二字めについて、「臨水觀魚」詩の横の配列を確認してみると、四句ごとの段落を意識して、各句の二字目は●●○○●●、●●○○●●と、前半段落と後半段落で同じパターンを繰り返している。しかし、張正見詩は近体詩ではないので、●●○○●●、○○●●●●、●●○○●●であって、規則性が認められない。

紀末茂の「臨水觀魚」詩は、冒頭で、作者(釣者)の隠棲する環境を示し、船で釣り場へ移動するさまを緊密な対句で表現する。後半「苔揺識魚在」句以降は釣り場で、題字どおり水中を観察し、餌に誘き寄せられる魚の「貪心」に対する嘆息で締めくくる、という構成である。張正見の詩は樂府題の五言十二句で、三つの段落に分かれている。比較しやすいように、上段に張正見の「釣竿篇」を、下段に紀末茂の「臨水觀魚」詩を置く。下段の空白箇所が紀末茂によって張正見詩から省かれた部分であり、二重傍線部が文字を改めた箇所である。

釣竿篇 臨水觀魚

張正見 紀末茂

結字長江側 結字南林側 宇を結ぶ南林の側

垂釣広川濤 垂釣北池濤 釣を垂る北池の濤

竹竿横翡翠

桂髓擲黄金

人來水鳥没

櫂度岸花沈

蓮揺見魚近

綸畫覺潭深

渭水終須卜

滄浪徒自吟

空嗟芳餌下

獨見有貪心

人來戲鳥没 人來れば戲鳥没し

船渡緑萍沈 船渡れば緑萍沈む

苔揺識魚在 苔揺らぎて魚在るを識り

縉畫覺潭深 縉畫きて潭の深きを覺ゆ

空嗟芳餌下 空しく嗟く芳餌の下

獨見有貪心 獨り見る貪心有るを

二つの作品を並べてみると、紀末茂の詩が張正見の詩にもとづいていることは明らかであり、文字だけ見ると、〈盗作〉との悪評も領ける。対句を整えるために字句を改めるなどの工夫のあとが見て取れるとはいうものの、意図的に張正見詩と類似の語句を使用したことは疑いが無い。しかし、全体の趣旨については如何であろうか。同じ語句を多く使用すれば、主題もそのままになるとの思い込みは早計であろう。少なくとも詩題は変えられているのである。釣竿篇は樂府題であり、本来は、徳のある皇帝が太公望呂尚のごとき賢臣の補佐を得て大功を成し遂げることを歌うものである。紀末茂が釣竿篇の語句を利用しながらも詩題を変えたのは、主題が異なるからである。

張正見詩の十二句そのままではなく、八句にあらためた点も重要である。句数を変えれば調整すべき箇所も生じる。なぜ八句にする必要があったのか、律詩形式にすることだけが目的であったわけではないだろう。四句を削除することによって如何なる効果を狙ったのか、或いは、不都合な表現と考えて削除したものなのか、当時の官僚の思想を視野に入れて考察すべきであろう。

さらに、釣の舞台を「川」から「池」に変えたことにも注意を払っておきたい。紀末茂は、釣りを行うたう作品であるにも拘わらず、「川」を意味する語を全て削ってしまったのである。張正見は一首の中で「長江」「広川」「渭水」「滄浪」と四カ所で川を詠んでいるが、紀末茂はこれらを一つも残さずに削ってしまったのである。張正見詩の第一句の「長江」は「南林」に、第二句の「広川」は「北池」に改め、「渭水」「滄浪」を含む第九句と第十句は削除してしまったのである。先行研究で、このことに注意が向けられなかったのは、両作品の類似部分だけが強調されてきたからであろう。漢字一字が持つ意味内容からすれば、五言十二句（六十文字）を、その三分の二の八句（四十文字）に縮め、かつ、残りの文字のうち三割に相当する十二文字を置き換えているわけであるから、内容は変化するはずであろう。また、十二句を八句に改変することは、そうたや

すいことではない。以下、変えられた部分に注目していく。

詩は通常、四句ずつのブロックで意識されるため、張正見詩では第五句から第八句までの「人來水鳥沒 檝度岸花沈 蓮揺見魚近 縉盡覺潭深」が一つの段落として意識される。一方、紀末茂の詩では「人來戲鳥沒 船渡綠萍沈」の二句は前半の段落、「苔揺識魚在 縉盡覺潭深」は後半の段落として、二つに分断されてしまう。そのことも意識して紀末茂詩は構成されているのである。二つの段落という意識は、先に述べた各句の二文字目の平仄の横の並び●○○●●●の繰り返し返しからも見て取れる。

また、張正見詩が第二段落で、「水鳥」「岸花」「蓮」と水辺の描写をする箇所を、紀末茂は水辺の「戲鳥」↓水面の「綠萍」↓水中の「苔」と徐々に焦点を絞り、さらに「縉盡覺潭深」として、享受者の意識を巧みに水中の釣糸へと導いている。

ところで、林古溪は当該詩について「淡淡平平。それで写生は確かである。奇語妙句をならべてない。それで悠悠としてあくがぬけてをる。結末二句、多少の風刺。空嗟と独見とを用ゐて、露骨に終らなかつた。」と評している。小島憲之は「詩句の実情に即しない不要の部分を除き、主要な部分を盗んで五言八句の詩に改作」と指摘している。前者は作品の隠微的な釣人生活の描写を、漢詩実作者の立

場から評価し、後者は語句の典拠研究の立場から、張正見詩の語句との関連について考察しているが、どちらも詩題を改めたことを見逃しているのである。しかし、林の「露骨に終わらなかつた」、小島の「詩句の実情に即しない不要の部分を除き」という部分は示唆的である。

### 三 削除された「渭水終須卜、滄浪徒自吟」

張正見詩の十二句から四句を除いて八句にする、つまり、削除された「竹竿横翡翠、桂髓擲黃金」および「渭水終須卜、滄浪徒自吟」の部分が紀末茂のテーマには不要だったとみることもできる。単に律詩形式に整えるのが目的ならば、他にも除くことが可能な句はある。例えば、冒頭の二句を削除して、第三句の「竹竿」から詠じはじめてもよい。「竹竿」の語を残せば、冒頭二句が無くとも水辺にいて釣りをしていることは表現できるからである。或いは、第五句・六句「人來水鳥沒 檝度岸花沈」を削除してもよい。むしろ、その方が全体の意味は通りやすいが、末茂の詩には「池」も「船」も必要だったことになる。それは作詩の場と関わるのであろう。おそらく、離宮が貴族の邸苑の池だったからに相違ない（『万葉集』卷三の鴨君足人の「香具山歌」にみえるような大宮人が船遊びできるような池が想像されよう）。

ともあれ、当該作品の題は「臨水觀魚」であつて、樂府題「釣竿篇」ではない。穿つた見方をすれば、紀末茂が敢えて題を変えた理由は、所謂「釣竿篇」とは漢詩制作上の目的が異なるからなのだといえよう。「臨水觀魚」詩は文字通り、釣り糸を垂れながら、餌の匂いにつられて近づく魚の様子を観察し、(危険を察知できず) 餌を食う魚のあさましい姿に嘆息する人物を描く。当然、その釣人は欲望や利益を超越した存在として設定されているのである。

これに対して、張正見詩が第二段落で魚釣りの様子を詳細に描くのは、釣り場から第三段落の「釣られる魚」へ収斂させ、結末の主題部「空嗟芳餌下、獨見有貪心」へと繋げるための工夫である。結句が示す嘆息は餌(名利)に惹かれる人間の貪欲な心に対してである。魚の欲望を人間のそれと重ねるために、「渭水終須卜、滄浪徒自吟」(渭水は終に須らく卜すべし、滄浪は徒に自ら吟ず)が効果的に配されている。やはり、紀末茂と張正見の作品の違いを大きく左右しているのは削除されたこの二句の有無であろう。「渭水」は太公望が釣をしていて文王と出会つた場所であり、「滄浪」(漢水の流域)は屈原が讒言に遭つて放逐され、彷徨しているときに漁父と出会つた場所である。滄浪の漁父は老莊的な思想を持つ隠者として登場し、屈原に対して「世が治まれば出て仕え、世が乱れれば隠遁すべき」こと

を寓した言葉を残して去る。渭水も滄浪も己の生き方の決断を迫られる場所として提示される。この部分がある故に張正見の詩の結末は(人間の利益・榮達を嘆ずる)表現となり、この二句を削つた紀末茂の詩は、ただ(魚の愚かさ客観視する)表現となり得たのである。

ついでながら、張正見は「渭水」と「滄浪」をいうために、その伏線として冒頭部で「川」(長江・広川)を詠まねばならなかつたのである。紀末茂には「渭水」も「滄浪」もうたう必要がないため、あえて実際の作詩の場を意識して「池」を詠み、さらに「南林」「北池」として対句を整えたのである。

ところで、張正見の詩から削除された句は他にもある。第三・四句の釣道具の豪華さをいう部分「竹竿横<sub>二</sub>翡翠<sub>一</sub>、桂髓擲<sub>二</sub>黃金<sub>一</sub>」である。豪華で贅沢な釣の様子を描く。当時の作者層或いは彼らが仕える王侯貴族の生活が反映されているのであろうが、類似の対句は六朝期の詩に少なからず用いられている。この表現は張正見より半世紀ほど早く活躍した劉孝綽の詩にも、隋の時代まで生存した李巨仁の詩にも使用されていることから、定番化した表現として知られていたのであろう。

イ 金轄茱萸網、銀鈎翡翠竿

(劉孝綽「釣竿篇」第三・四句)

口 不<sub>レ</sub>惜黄金餌、唯憐<sub>二</sub>翡翠竿<sub>一</sub>

(李巨仁「釣竿篇」第三・四句)

竹幹の緑色と質感が「翡翠」を連想させるのであろう。翡翠の対句には価値、色彩ともに「黄金」が相応しいようだ。また、桂は高級木材であるため、とくに、桂楫、桂櫂、桂棹、桂槳、桂櫂など、六朝時代の貴族の文学活動において、船遊びの場面で常套的に使用される。張正見詩の「桂髓」は桂の最良の芯材を惜しげもなく使う富裕層の気儘で贅沢な生活ぶりを表現しているわけだが、紀末茂はこの部分を不要と考えて削除したのである。俗人が利益や仕官の禄を求めて群がるさまを匂わせるためには、「翡翠」「金」「銀」「桂髓」などの語句を使用することが有効なのであるが、紀末茂はこれを省いたのである。その理由は、文武朝官人が求める隠者のスタイルとは合致しなかったからであろう。なお、紀末茂は四句を削除したほかにも冒頭の対句を改めるなど、細かい工夫の跡を残しているが、その中で注意しておきたいのが、第六句目(張正見詩では第八句)の釣り糸を表す文字である。張正見は「綸」を用い、紀末茂はそれを「縉」にかえている。どちらも釣り糸の意味で使用される文字であるが、「綸」の方には、(治める、つかさどる)意があり、「綸言」「綸旨」など天皇の言葉の意味する語に使用されるため、避けたものと思われる。紀末茂が影

響を受けた可能性のある初唐までの「釣竿」をテーマとする作品中の「つりいと」の用字を確認してみると、「綸」と「絲」が多く、釣糸そのものを直接表現しないものがある一方で、紀末茂と同じ「縉」を使用した例は見出せなかった。紀末茂の場合は、張正見の語句をそのまま使用するのと、「綸盡覺潭深」(天皇の御意向が届かない)という政治批判と誤解される恐れがあるため、文字を変えたのである。意図的に張正見の詩を利用しつつも、そこから脱却して、作詩の場に相応しいものに仕上げたのである。

#### 四 我国の「芳餌」の用例と隱逸思想

既に述べたように、詩題を変更したことも関わることだ。が、「滄浪徒自吟」の語の有無で「芳餌」の意味は変わってくる。現存する「釣竿篇」および周縁の作品は、「(隱遁)を是とするものと、それとは逆に(政治に参画する)ことを是とするものとに分けられる。釣りは隱逸の象徴であつて、太公望呂尚のように、一時的に政權から遠ざかつて(時節を俟つ)こととの表現を含めて、現在の政治体制批判へと發展する方向性を持つていた。釣竿篇の基本語彙ともいえる「芳餌」は、字面上の解釈でいえば、(よい匂いのする餌)であるが、古くから人を誘惑するため利益、欲望の象徴あるいは「厚遇」の比喩としても使われてきた語で

ある。既に『淮南子』の「説林訓」には、

一目羅、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以得<sub>レ</sub>鳥、無<sub>レ</sub>餌、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以得<sub>レ</sub>魚、  
遇<sub>レ</sub>士無<sub>レ</sub>礼、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以得<sub>レ</sub>賢。

とあり、士を遇するには礼を厚くすることを説く。当然、敬意や謝意を表すための（礼物）を釣りの餌に比喻する。

また、『三略』には、

香餌之下、必有<sub>二</sub>死魚<sub>一</sub>、重賞之下、必有<sub>二</sub>死夫<sub>一</sub>

とある。張正見の詩においては、「滄浪」の語によって屈原を想起させる以上、「芳餌」が人間の利益や仕官後の禄をさすことは明らかである。むしろ、そのことを明確にするために、張正見は「滄浪」を持ち出したのであろう。

「芳餌」によって釣る者と釣られる者が存在するわけであるが、我国においての使用は限定的である。『統日本紀』養老七年九月の記事に、

出羽国司正六位上多治比真人家直言、蝦夷等惣五十二人、功効已顯、酬賞未<sub>レ</sub>霑、仰<sub>レ</sub>頭引<sub>レ</sub>領、久望<sub>二</sub>天恩<sub>一</sub>。伏惟、芳餌之末、必繫<sub>二</sub>深淵之魚<sub>一</sub>、重祿之下、必致<sub>二</sub>忠節之臣<sub>一</sub>。

とある。これは（まつろわぬ者）であった蝦夷たちを褒賞によって懐柔することをすすめる奏上であって、古くから仕える廷臣に対して用いる表現ではない。

政治に不満をもつ知識階級が野に下って隠者となる。こ

のため、論理的には何時の世にも隠者は存在するはずなのであるが、王朝交代や政權交代が常にあり得た中国とは異なつて、律令体制が整つた頃の我国においては、政治批判も時節を俟つて隠遁するような思想も育たなかつた。終身奉公が基本であるから老齢や病気を理由に隠居を願ひ出る場合は（乞骸骨上表<sup>⑩</sup>）を書くことになるが、慰留されるのが普通であつた。『懷風藻』中の藤原不比等の詩句には世を避けて隠れる者のいない理想の治世が謳われている。

ハ 隱逸去<sub>二</sub>幽藪<sub>一</sub>、没賢陪<sub>二</sub>紫宸<sub>一</sub>

（春日侍宴応詔「藤原不比等」）

藤原不比等の詩句の意味するところは（天皇の政治が良いので、世を避けて幽藪に隠れていた隠者もそこを去つて朝廷に仕え、埋もれていた賢者も見いだされて天皇に陪席する）という皇徳の讚美である。隠者も埋もれた賢者も存在しない理想の治世に、渭水のほとりで釣り糸を垂れる人物は存在せず、まして滄浪で彷徨する人物など論外である。不比等は養老年間まで活躍するが、右に引用した「春日侍宴応詔」詩はその配列からみると文武朝に作られた可能性も否定できない。

なお、ハのように隠者の存在を否定する一方で、老荘思想や神仙思想にも憧れを抱く八世紀初頭の官僚が、折り合いをつけた考え方が、一時的に隠者の気分を味わつて心を



解放することであった。中国の歴史書にも、仕官して高位

に居りながらも恬然として隠士の操を守る人物が「朝隠」

として描かれるが、我国では遊覧や行幸の際に、その場所

で限定的に隠者や仙人の気分を味わうのである。たとえば、  
二 姑射<sup>ニ</sup>太<sup>ニ</sup>賓<sup>ニ</sup>、崆<sup>ニ</sup>嶽<sup>ニ</sup>索<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>仙<sup>ニ</sup>、豈若<sup>ニ</sup>聽<sup>ニ</sup>覽<sup>ニ</sup>隙<sup>ニ</sup>、仁<sup>ニ</sup>智<sup>ニ</sup>

寓<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>川<sup>ニ</sup>、「春日<sup>ニ</sup>応<sup>ニ</sup>詔<sup>ニ</sup>」巨<sup>ニ</sup>勢<sup>ニ</sup>多<sup>ニ</sup>益<sup>ニ</sup>須<sup>ニ</sup>」

ホ 覽<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>余<sup>ニ</sup>暇<sup>ニ</sup>、遊<sup>ニ</sup>息<sup>ニ</sup>瑤<sup>ニ</sup>池<sup>ニ</sup>濱<sup>ニ</sup>、「遊<sup>ニ</sup>覽<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>」大<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>王<sup>ニ</sup>

ヘ 欲<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>間<sup>ニ</sup>居<sup>ニ</sup>趣<sup>ニ</sup>、来<sup>ニ</sup>尋<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>幽<sup>ニ</sup>

ト 野<sup>ニ</sup>客<sup>ニ</sup>初<sup>ニ</sup>披<sup>ニ</sup>薜<sup>ニ</sup>、朝<sup>ニ</sup>隱<sup>ニ</sup>覽<sup>ニ</sup>投<sup>ニ</sup>簪<sup>ニ</sup>……自<sup>ニ</sup>得<sup>ニ</sup>幽<sup>ニ</sup>居<sup>ニ</sup>心

〔遊<sup>ニ</sup>吉<sup>ニ</sup>野<sup>ニ</sup>川<sup>ニ</sup>〕藤<sup>ニ</sup>原<sup>ニ</sup>宇<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>〕

などの表現は懷風藻中にも枚挙にいとまがない。巨勢多益須(七一〇大宰府没)、犬上王(七〇九没)、大神安麻呂

(七二四没)の活躍時期は、紀末茂とほぼ同じである。

中国六朝時代の王族や富裕な元権力者が政変を避けて、

命を全うするために政治と距離を置き、山中で悠々自適の生活を送るのとは異なる。八世紀初めの我国の官僚が求めたのは、「聴<sup>ニ</sup>覽<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>隙<sup>ニ</sup>」であり、「しばらく三余の暇を以て」

「朝隠しばらく簪を投げ」であり、普段は味わうことのできない隠者的な閑居の趣を一時的に味わう。それを自ら

「朝隠」(朝廷にいながら隠者の高尚な心を持つ者)と称するのである。屈原のように進退を決めかねて滄浪で彷徨す

る者の存在など表現できないのである。

## 五 皇帝讚美と太公望呂尚

さて、紀末茂が張正見の「釣竿篇」を踏まえて「臨水觀

魚」を作った際の目論見を考察するにあたって、「釣竿篇」

の基本的な事柄を押さえておこう。「釣竿篇」は鼓吹曲辞

の樂府詩として扱われてきたものである。「晋書」の「樂

志」には、もともと漢代の「短簫鏡歌之樂」二十二曲の一

つであつたことが記され、漢から魏、さらに晋へと鼓吹曲

辞として改変を経ながら伝えられたとされている。また、「釣竿、列<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>鼓<sup>ニ</sup>吹<sup>ニ</sup>、多<sup>ニ</sup>序<sup>ニ</sup>戰<sup>ニ</sup>陣<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>」、「釣竿、依<sup>ニ</sup>旧<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>、言<sup>ニ</sup>聖<sup>ニ</sup>皇<sup>ニ</sup>德<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>堯<sup>ニ</sup>舜<sup>ニ</sup>、又有<sup>ニ</sup>呂<sup>ニ</sup>望<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>佐<sup>ニ</sup>、濟<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>功<sup>ニ</sup>致<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>太<sup>ニ</sup>平<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>也。」(堯舜と同等の徳をもつ皇帝を、太公望呂尚のような人物が補佐すれば、大功を成し遂げて天下は太平となる意)とも説明されている。「釣竿」が為政者讚美の立場で

うたうものであることも押さえておきたい。なお、『晋書』の「樂志」に示される「釣竿篇」は次のようなものである。

釣竿何<sup>ニ</sup>冉<sup>ニ</sup>冉<sup>ニ</sup>、甘<sup>ニ</sup>餌<sup>ニ</sup>芳<sup>ニ</sup>且<sup>ニ</sup>鮮<sup>ニ</sup>、臨<sup>ニ</sup>川<sup>ニ</sup>運<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>、微<sup>ニ</sup>綸<sup>ニ</sup>

沈<sup>ニ</sup>九<sup>ニ</sup>泉<sup>ニ</sup>、太<sup>ニ</sup>公<sup>ニ</sup>宝<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>術<sup>ニ</sup>、乃<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>靈<sup>ニ</sup>秘<sup>ニ</sup>篇<sup>ニ</sup>、機<sup>ニ</sup>變<sup>ニ</sup>隨<sup>ニ</sup>物<sup>ニ</sup>

移<sup>ニ</sup>、精<sup>ニ</sup>妙<sup>ニ</sup>貫<sup>ニ</sup>未<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>、遊<sup>ニ</sup>漁<sup>ニ</sup>驚<sup>ニ</sup>著<sup>ニ</sup>釣<sup>ニ</sup>、潜<sup>ニ</sup>龍<sup>ニ</sup>飛<sup>ニ</sup>辰<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>……

(五言十五句省略) ……黃<sup>ニ</sup>帝<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>兵<sup>ニ</sup>征<sup>ニ</sup>萬<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>、逮<sup>ニ</sup>夏<sup>ニ</sup>禹<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>德<sup>ニ</sup>衰<sup>ニ</sup>、三<sup>ニ</sup>代<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>虞<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup>唐<sup>ニ</sup>、我<sup>ニ</sup>皇<sup>ニ</sup>盛<sup>ニ</sup>德<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>堯<sup>ニ</sup>舜<sup>ニ</sup>、

受<sup>レ</sup>禪即阡享<sup>二</sup>天祥<sup>一</sup>、率<sup>レ</sup>土蒙<sup>レ</sup>祐、靡<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>肅、庶事康、庶事康、穆穆明明、荷<sup>二</sup>百祿<sup>一</sup>、保<sup>二</sup>無極<sup>一</sup>、永<sup>二</sup>太平<sup>一</sup>。冒頭に「釣竿」と「餌」を誉めているのは、政治を補佐する「太公望呂尚」のことをいうためであり、最後部では、皇帝の徳が受禪に相応しいことを謳って寿詞でしめくくる。『楽府詩集』に収載される釣竿篇とは様相を異にする。

なお、紀末茂が目にした可能性のある同題の作品（「釣竿行」或いは「釣竿篇」としては、魏の文帝、晋朝の鼓吹曲辭、梁の沈約、戴嵩、劉孝綽、陳の張正見、隋の李巨仁、初唐の沈佺期のものがあげられる。最も古いのは魏の文帝の作とされるものである。

チ 東越<sup>二</sup>河濟水<sup>一</sup> 遙望<sup>二</sup>大海涯<sup>一</sup> 釣竿何珊珊

魚尾何篋篋 行路之好者 芳餌欲<sup>二</sup>何為<sup>一</sup>

（「釣竿行」魏・文帝）

鼓吹曲は、短簫鑿鼓の軍樂である。確かに、魏の文帝の「釣竿行」は、東の涯まで勢力を拡大させることをうたい、氣宇壮大で軍樂にふさわしい内容である。第五句および六句は（将来の道が開けた者は今さら芳餌など求めない）の意であろう。晋朝の鼓吹曲辭「釣竿」の冒頭にも「釣竿何ぞ冉冉たる、甘餌芳しく且つ鮮し」とあったが、「釣竿」と「芳餌」は基本語句のようである。

しかし、時代が下るにつれて応用的な作品も現れ、「釣

竿篇」が本来的には如何なる内容をうたうものなのかが曖昧になっていく。釣人は隱者の象徴として描かれるという伝統的な考え方があったからである。つまり、「釣竿篇」の作品の主題が明確ではないのは、（釣りをすること）自体が、（政權と距離を保つこと）、（政權に参画する）、この相反する二つの思想を象徴しているからである。

晋朝の鼓吹曲辭「釣竿」では、冒頭に釣竿がうたわれるが、「釣」の行為そのものに重点は置かれていないので、それに関する描写はない。太公望呂尚の如き賢者を見出すことをいうのに釣竿の語が必要だけである。賢宰相の補佐を得た理想の周王朝に匹敵する治世をうたつて皇帝を讚美するのが、「釣竿篇」の本来のありようで、釣竿は王と賢宰相を結びつける道具且つ政治的手腕を示すものとして提示される。

その一方で、古くから（釣者）（＝漁父）は、政治とは無縁の生き方をするものの象徴として描かれてきた。老莊思想を実践しつつ、生を養うべき環境に身を置き、政治とは距離を保つ隱者的存在でもあった。釣り三味の隱遁生活とその環境としての山水を描いて讚美するものが、山水詩の發達とともに増えていく。そのために朝廷の儀式の際に使用する鼓吹曲辭との内容に開きが出てきたのである。それゆえ、同じ「釣竿」でも、釣りそのものを表現する作品

があらわれるのである。いずれも『芸文類聚』卷四十一の楽部「論楽」に収載される詩である。詩題ゆえに楽府詩として採られたものと見られるが、張正見詩に先立つ沈約や戴嵩の詩は釣りを楽しむことを主題としている。沈約の詩をあげておく。

桂舟既容与

緑浦復回紆

輕絲動弱菱

微楫起单鳧

扣舷忘日暮

卒歲以為娛

〔釣竿〕梁・沈約

ついでながら、張正見は「釣竿篇」を作る一方で、自由に泳ぐ魚の立場から詠んだ詩も作っている。

又 漾色桃花水

相望濯錦流

躍浦疑珠出

依池似鏡浮

凌波衝落藥

触餌避沈鉤

方遊蓮葉外 詎入武王舟

〔賦得「魚躍水生」〕陳・張正見

ここでは「いづくんぞ入らむ武王の舟」として、太公望呂尚の故事を意識した句で締めくくってはいるが、本来の「釣竿篇」とは反対の立場である。また、次に掲げる詩は逆に、釣りの楽しみを歌いながらも「言を寄す縷を濯ぐ者に、滄浪は終に滯遊せん」（滄浪で縷を濯ぐ者よ、滄浪にいと世に埋もれたままで終わるぞ）として、隠者を招く表現を残している。

ル 澄江息晚浪

釣侶柁輕舟

絲垂遙瀨水

餌下暗通流

歌声時斷続

櫂影乍橫浮

寄言濯縷者

滄浪終滯遊 〔觀釣〕陳・陰鏗

作者の陰鏗は張正見と同じく梁から陳にかけて活躍した人物で、この「觀釣」詩は、『芸文類聚』「産業部・釣」および「初学記」「武部・漁」にみえる。

『晋書』の「樂志」のように「有呂望之佐、以濟天功致太平也」と説明されても、やはり、「釣竿」（つりざお）から連想される事柄は（政治とは距離を置いた隱逸の世界）であり、楚辞の「漁父」や滄浪之歌「滄浪之水清兮可以濯吾纓、滄浪之水濁兮可以濯吾足」へとつながるのだろう。それゆえ、張正見の「釣竿篇」も「渭水終須下、滄浪徒自吟」としたのである。この句を晋の樂府のような釣竿篇本来の（為政者讚美）と結びつけて考えれば、「滄浪などで悩まず、渭水で釣りを楽しめば仕官が叶う」という隠者を呼び招く表現とも捉えられるであろう。

## 六 おわりに

最後に、紀末茂が敢えて張正見詩に似せた作品を作った理由について私見を述べておく。当該詩が意図的に張正見詩の特徴的な語句を利用したことについては、擬古詩的な手法を用いたものと捉えておきたい。『文選』の詩部には「雜擬」の項目が立てられ、所謂擬古詩の他に、詩題に

「傲」や「擬」を冠したものを集めている。そこには「擬四愁詩」や「擬魏太子鄴中集詩」などの作品も収載されている。六朝期のみならず初唐に至っても、長孫正隱らの「上元夜傲小庾体」や許敬宗の「擬江令於長安一婦揚州九日賦」など、先行作品のかたちをまねて下敷にする作品が作られている。二人が活躍した高宗の時代（在位六四九—六八三）には我国から五度の遣唐使が派遣されているので、渡唐した官僚や留学生らが、当時行われていたこの手法を見聞した可能性もあるだろう。許敬宗の例がわかりやすいのであげておく。

ヲ 心逐<sub>二</sub>南雲<sub>一</sub>逝 形隨<sub>二</sub>北雁<sub>一</sub>來

故鄉離<sub>二</sub>下菊<sub>一</sub> 今日幾花開（隋・江総）

ワ 本逐<sub>二</sub>征鴻<sub>一</sub>去 還隨<sub>二</sub>落葉<sub>一</sub>來

菊花心<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>滿 請<sub>下</sub>待<sub>二</sub>詩人<sub>一</sub>開<sub>上</sub>（唐・許敬宗）

陳と隋に仕えた詩人江総のヲ「於長安一婦還揚州」九月九日行<sub>二</sub>徽山亭<sub>一</sub>賦韻をもとにして、その筆意を写したものが許敬宗のワである。江総の詩句を一部変えてはいるものの、全体の印象も趣旨も変えず、押韻文字も「開」をそのまま使用しているのである。

この手法が我国にもたらされていたことは、『懷風藻』に収載された作品からも確認できる。紀末茂よりも少し後になるが、明らかに、一方がもう一方に倣った作品がある。

カ 萬丈崇巖削成秀 千尋素濤逆折流

欲<sub>レ</sub>訪<sub>二</sub>鍾池越潭跡<sub>一</sub> 留連美稻逢<sub>レ</sub>槎洲

（遊吉野川）紀男人）

ヨ 高嶺嵯峨多<sub>二</sub>奇勢<sub>一</sub> 長河渺漫作<sub>二</sub>廻流<sub>一</sub>

鍾池超潭異<sub>二</sub>凡類<sub>一</sub> 美稻逢<sub>レ</sub>仙同<sub>二</sub>洛洲<sub>一</sub>

（吉野之作）多治比広成）

両作品は『懷風藻』には少ない七言絶句であり、「流」「洲」の同じ押韻文字を使用して、第一句に切り立った岩、第二句に激しい流れを詠んで対句とする。第一句末の韻を踏み落<sub>上</sub>としにする点も同じである。そのうえ、同じ故事を詠む第三句と第四句の印象もそっくりである。また、『懷風藻』中には「擬四愁詩」も残されていることから、奈良時代にはこのような作詩方法が認知されていたことが確認できる。前掲作品はいずれも原作の特徴的な語句を使用し、且つ主題もそのままであるため、主題を変えた紀末茂詩とは同列に扱うことはできないものの、それとわかるかたちで先行作品を利用する点で、通じるものがある。

冒頭でも触れた通り、紀末茂と同時代（文武朝）の知識階層も半世紀後の懷風藻編者も張正見の「釣竿篇」を知らなかったとは考え難い。だとすれば、人々は紀末茂の「臨水觀魚」詩が張正見の「釣竿篇」を踏まえた擬古詩的な手法をとるものであることを理解したうえで、即興的に釣り

を楽しむ内容に再構成した力量を評価したということなのだろう。

紀末茂「臨水観魚」詩は、張正見の「釣竿篇」を擬しながらも、主題を詩作の「場」に沿ったものに改め、自分たちの行動様式に叶う内容としたのである。つまり、「悠々自適の釣人」（『暫時の隱遁的行動を楽しむ官僚』を描くことを意図した作品であると結論づけることができよう。

そのために、張正見詩では重要な意味を持つ「渭水終須卜、滄浪徒自吟」をあえて削除したと考えたい。作者のみならず、そこに同席した人々も「釣竿篇」的作品が（「隱者の楽しみ」と「隱者の召喚」という二つの方向性を持つことを理解していたのである。

紀末茂が描こうとした釣人（朝隱）は、先に掲げた二つの表現と同じ思想に支えられているといえよう。巨勢多益須や犬上王らは末茂と同時代の官僚である。ここで想起されるのが『懷風藻』の序文である。序文を書いた編纂者は、近江朝に至って制度が整えられ世の中がよく治まったため、官僚たちは閑になり酒宴を開いて文学活動にいそしんだことを述べている。編者が憧れた古き良き理想の時代である。天武持統朝には些か下火になっていた漢詩制作活動が文武朝に入ると再び盛んとなる。この時期に紀末茂の詩は作られたのである。このことを考え合わせるとき、編

纂者の目には「臨水観魚」詩が描く、欲望や利益を超越して暫く隱者の世界に浸るといふ思想は、「官僚の理想の姿」として写ったのであろう。技術的にも高い水準にあることが認められたのは言うまでもない。

## 注

(1) 紀末茂の生没年不明。但し、『懷風藻』は作者を世代と活躍時期によって配列しており、紀末茂の後に置かれる釈弁正は大宝年間に渡唐して没し、続く調老人も大宝年間に没したとみられることから、末茂の没年も大宝から慶雲の頃と推測される。

(2) 沢田総清『懷風藻註釈』（昭和8年7月）。杉本行夫註釈『懷風藻』（昭和18年3月）。林古溪『懷風藻新註』（昭和33年12月）

(3) 大野保『懷風藻の研究』（三省堂 昭和32年2月）の研究篇一九六頁に「模倣の域を脱してほとんど剽窃である」。小島憲之校注『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』（岩波古典文学大系 昭和39年6月）九五頁頭注に「陳人張正見の釣竿篇の盜作」とある。また、『上代日本文学と中国文学 下』（塙書房 昭和40年3月）一二六〇頁にも同様の記述がある。なお、この指摘は、大野保『懷風藻と六朝初唐の詩』（『国文学研究』昭和19年11月）が最初。

(4) 張正見は六世紀に活躍した詩人。梁の簡文帝が東宮の

ときに才能を認めて登用。梁の滅亡後は陳の武帝に仕えた。「釣竿篇」の制作時期は不明。

(5) 辰巳正明『懷風藻全注釈』（笠間書院 平成24年9月）

(6) 鳥羽田重直「紀末茂の臨水觀魚」（國學院大學『日本文学論究』30 昭和46年3月）集句とは、古人の複数の作品から句を集めて一首の詩として再構成するもの。

(7) 「侍宴」「応詔」など題によって公的な場で詠まれたことが明確なものが多い。また、独詠を思わせる「山齋」「述懷」詩の中にも「宴飲」「開良宴」などの語句がみられ、集団の場で詠まれたことが明らかなものだけでも八割に及ぶ。

(8) 個人の詩集としては、藤原宇合と石上乙麻呂のものが存在していたことが『懷風藻』によって知られる。そこから宇合は六首、乙麻呂は四首が採られている。

(9) 釣糸の用字の例を挙げておく。

- ① 「釣竿行」（魏・文帝）釣糸なし
  - ② 「釣竿」（晋の鼓吹曲）〔綸〕沈九淵
  - ③ 「釣竿」（梁・沈約）〔綸〕輕絲動弱支
  - ④ 「釣竿」（梁・戴嵩）〔綸〕翠羽飾長綸
  - ⑤ 「釣竿篇」（梁・劉孝綽）〔綸〕菱芒乍冒綸
  - ⑥ 「釣竿篇」（陳・張正見）〔綸〕盡覺潭深
  - ⑦ 「釣竿篇」（隋・李巨仁）〔綸〕控急水
  - ⑧ 「釣竿篇」（唐・沈佺期）釣糸なし。
- (10) 神龜五年八月「守部連大隅上書乞骸骨」、天平宝字六年七月「病久不捐上表乞骸骨」

(11) 不比等詩の「没賢」を岩波大系本は「賢でない者」とするが、この語は「埋もれた賢者」の意とみるべきである。没は埋もれる、かくれる、現れない意。

(12) 月野文子「懷風藻の押韻」（和漢比較文学叢書『上代文学と漢文学』昭和61年9月）で述べた。

(13) 七言絶句は第一句末にも押韻するのが普通であるが、第一句と第二句とを対句構成にする場合には、第一句末に押韻しない。これを初句の踏み落としという。初唐詩に少なからず例がみられる。

※『懷風藻』の本文は、岩波古典文学大系本に拠り、その他の詩文は『晋書』（中華書局版）、『芸文類聚』（中文出版社版）、『初学記』（鼎文書局版）、『樂府詩集』（中華書局版）、『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局版）に拠った。